

## いっしょにぞしを果たす

— 根本 正 —

## 代議士

戦前、国民の参政権を反映して当選した国会議員を指して使われたことから、主に衆議院議員を指す表現。

人はいくつになっても、夢やあこがれをもち、その実現に向けて挑戦する権利とチャンスがある。

幕末から明治へ、日本が迎えたかつてない激動の時代に、そんな生き方を実現した人物がここ那珂市にいた。代議士根本正である。彼の視線の先には、常に故郷茨城の若者たちの姿が見えていた。

江戸時代末期の嘉永四年十月（一八五一年）那珂市東木倉の庄屋の次男として根本正は生まれる。ペリー来航の二年前、時代が大きく動きだした時期であった。十三歳になり親類知人の紹介で水戸に出た正は、めまぐるしく変わりゆく環境の中で、ひたすら学問に励んだ。そんな中、青年期を迎えた彼の運命を変えるできごとが起こる。当時、洋行帰りの人からマツチと時計を見せられたのである。

「なんて西洋は進んでいるんだ。これからは、西洋の文化が日本を変えていく。西洋の文化を直接学ぶために、西洋の言葉を学ばなければならない。」

それまで、何かと西洋文化に興味を抱いていた正は、衝撃を受け、思い切って上京する。何とかして外国へ渡り、西洋の学問を直接学びたいと考えたのである。明治四年、正が二十歳の時だった。

当時、人脈や財力といった後ろだてのない者が、働きながら英語を学ぶということは、想像以上に困難なことであった。しかし、彼はどんなに苦しい環境の中でも、英語を学ぶための手段を、自らの力でどん欲に開拓していったのである。わずかな機会を見つけては英語を学び続け、渡米のチャンスをつかっていた。東京・神戸・横浜と次々と勉強の機会を求め、仕事と住まいを転々としていた正は、そんな生活の中で、たくさんの人々と出会う。その出会いは通して、正は英語以外にも多くのことを吸収していったのである。

横浜の外国郵便局で働いていたときであった。正は、その郵便局員の所属する団体の支援を受け、アメリカ行き貨物船に乗り込むことになる。たどり着いたのはアメリカ、カリフォルニア州オークランド。正にとって、はじめて



## バーモント大学

一七九一年に創立、  
アメリカニューイン  
グランド州の大学。  
「バーモント」とは、  
ラテン語で「緑豊か  
な山」という意味を  
持つ。

その時感じたこの思いは、後の正の代議士人生にも大きな影響を与えることとなる。

高校を卒業した正は、その努力と彼の人柄が見込まれ、バーモント大学への進学を援助してもらえらることとなつた。正はそこでも、猛烈に学んだ。やがて、そのバーモント大学を優秀な成績で卒業すると、いよいよ正は日本へと戻ってくる。その時、根本正は三十八歳、渡米後実に十年の月日が流れていた。

正は、やがて代議士となり、数々の法案を提出し成立させた。その中でも特筆すべきは「義務教育の無償化」と「未成年者禁煙禁酒法」の成立であろう。根本正が、「禁煙禁酒の父」、「義務教育の祖」と呼ばれるゆえんである。『人は教育の力により初めて人間となるものなり。小学校教育は教育の初歩なり。』

の、そして念願の外国の地であった。正は、紹介された地元の人  
の屋敷で使用人として働き出すが、その時、自分が日本で学んで  
きた英語が全く通じないことに大きなショックを受ける。

そして正は、英語を一から学び直す決心をし、地元の小学校に  
入学する。根本正、二十八歳であった。小学校で英語の基礎を  
学んだ正は、三十歳になり同じ地元の中学校へと進学する。そ  
こを四年で終え、さらに高校へと進む。正にとっては、相変わら  
ず働きながらの苦しい環境ではあったが、着々と英語の力を身  
に付けていくことができたのである。また、アメリカでのそう  
した暮らしは、国の力を高める上での教育の重要性を知る、貴重  
な経験ともなった。

「自分のような外国人に対しても、身分や人種の差別無く、無  
償で学べる機会を提供する、アメリカの教育制度はすばらし  
い。」



## 未成年者禁煙禁酒法

正式には、未成年者喫煙禁止法及び未成年者飲酒禁止法。満二十歳未満の者の飲酒の禁止に関する日本の法律一九二二年（大正十一年）に制定。

た根本正は、最後の選挙で、わずか三十三票の僅差で破れる。彼は、その後あっさり政界を引退するが、その際、彼は自らの支持者に対して、

「落選を感謝す。」

という言葉を残している。そこには、代議士として、精一杯の努力をし、為すべきことをやり遂げた実感と感謝の思いが込められている。そして、次世代を託した者たちへの彼なりのメッセージとして、様々な意味をもって語りかけている。

代議士となった正は、義務教育の必要性をそう説き、学校に通うべき子どもたちから授業料をとるのは、地域の道を通行する旅人に関税を課すことと同じだとして、無償化実現を訴えた。（※就学率は当時の児童数の三分の一以下。入学費用は現在に換算して三十万円程度。）さらに、「未成年者禁煙禁酒法」については、未来を担う子どもたちが、過酷な労働の末に酒やたばこにおぼれていく姿を憂慮し、他の代議士からの猛反発を押し切り成立させた。これには、実に十九回の法案提出と二十一年間という月日を要した、まさに執念の成立であった。

他にも、身近な貢献としては、水郡線の敷設をはじめ、那珂湊港の開設や利根川の治水工事など、地域に根ざした業績も多数存在する。国会議員として、様々な業績を残してきた根本正であるが、彼の人生は、そんな華やかな業績とは異なり、苦勞と忍耐の連続であった。

アメリカからの帰国後二十六年の長きに渡る代議士生活を送っ



「那珂市ゆかりの先人たち」より

## 根本 正

現在の那珂市東木倉に生まれる。二十七歳の時、単独でアメリカに渡り、小学校から学び直し大  
学まで卒業する。四十六歳で衆議院議員になると、青少年の健全育成関係や茨城の地域振興のため  
の政策を次々と打ち出す。特に「義務教育の無償化」「未成年者禁煙禁酒法」成立については、政治  
生命を賭けて取り組んだ。他にも、水郡線の敷設、那珂湊港の開港、利根川の治水工事等、茨城の  
地域振興に貢献する多くの業績を残した。